

旭ヶ丘園(特別養護老人ホーム及びケアハウス等)

理事長 園田修光先生の歓迎のあいさつ後、副園長等より同法人が運営されている福祉サービス全般についての説明。園田副園長から～

旭ヶ丘園では、5年前に次の時代を見据えて大改革を始めた。改革の一番大事なところは働く職員たちの尊厳が守られて、職員たち自身が働くことに喜びを感じ、幸せを感じていただけないと働く職員たちが介護する際に、表情・言葉等すべての面に現れて、介護技術は決して向上しないということに着眼し、職員との関わり方についての本質的な改革をやってきた。

全国的に3Kと言われて離職者も多く安定しない介護施設も多い中であって旭ヶ丘園は辞めていく職員が本当にいない。新規採用者が少なく困っている施設であって旭ヶ丘園では、どうしても旭ヶ丘で働きたいと言う生徒さんがいると要請があったので職員数は充足している中であっても今年度は採用試験を行い、さらに質の高い人材の確保が出来た。介護の質の高さをどこで測られるかと言うと、年度別入院日数推移で分かる。ベッド数80床のうち平成20年度の入院日数は1,180日に対し、25年度にはその10分の1の118日である。参考に23年度951日に対し24年度は288日であり、24年度から急激に下がった。その数値から改革が大体根が張ったと見られる。多くのことを同時期にやっていて、それがすべて形となって出てきている。もう1つの改革として園において看取りケアの推進である。本年度(10.1日現在)100%である。これは看護力・介護力・マネジメント力個々のアップ力だけではなく、すべてのことが合わされなければ実現出来ない。看取り100%は全国では本園だけである。その他に、たん吸引と経管栄養の実施における有資格者数は21名、県内施設で断トツ1位(看護部長が県内指導者の1人)、胃ろう、口腔ケア、マイクロスコープ(内視鏡)等々、かなり専門的なケアも行っている。

本園には職員が幸せな気持ちでなければ、決して良い施設にはならないという「哲学」がある。そのためには、職員同士のコミュニケーション、経営者と職員とのコミュニケーションをどう図っていくのか、ということで常々、関わり方について切磋琢磨している。同法人には経営企画室(7人のスタッフ)を設置して、ただ、介護するだけではなく、社会の状況をしっかりと捉えて、戦略的に企画経営をしている。

副園長等より詳細に説明、これに対する質疑後、同園が誇る全室個室型「新型特養」ユニットケア(施設だけど、我が家：専任介護スタッフがお世話する)の視察、従来型の多床型部屋を視察、また、リラクゼーション(利用者の不安や緊張感を和らげ、心身をリラックスさせるための物理療法機器)施設、天然温泉、さらには、入所しながらも外で就労可能であり自立した生活が送られるように工夫された新しいタイプの「ケアハウス」を視察しました。

